

青鳳会資料 脈診

◆基本脈について

一、祖脈

脈経（王叔和）に浮、沈、遲、數、の四脈を指すとある。しかし、二十數種類の脈状を表現するには無理がある。このため、この四脈に虚実を加えて六脈とする説や、これに滑、瀦を加えて八脈とする説などがある。祖脈とは、もともと基本となる脈状であり、これらの脈状を理解することから脈診の勉強が始まる。

二、平脈

平脈とは正常脈のことで一呼吸に四〜五回拍動し、胃氣の脈（脈位は中脈）が硬くも柔らかくもなく、太くもなく細かくもなく、「浮」いても沈んでもなく結代もない和緩なる脈状で更に、四季に応じた脈状を呈しているものを平脈という。

平脈について「難経」十五難には次の様にある。

春の脈は弦。夏の脈は鉤。秋の脈は毛。冬の脈は石。是れ玉脈か。はた病脈なりや。然るなり。弦鉤毛石は四時の脈なり。

春の脈弦とは、肝は東方の木なり。万物の始めて生ずるや、未だ枝葉有らず。故に脈の来ること濡弱にして長。故に弦という。

夏脈鉤とは、心の南方の火なり。万物の茂る所枝を垂れ葉を布く。皆下り曲がること鉤の如きなり。故に曰く鉤。

秋の脈とは、肺は西方の金なり。万物の終るところ、草木華葉みな秋にして落ちつ。その枝独り在る。豪毛の如くなり。故にその脈来ること、輕拳にして浮。故に曰く毛。

冬の脈石とは、腎は北方の水なり。万物を蔵するところ。盛冬の時、水凝り石の如し。故にその脈の来ること沈濡にして滑。故に石という。此れ四時の脈なり。とある。

また、「四難」では五臓の平脈を取り上げているので、抜粋して記述する。

心脈は浮、大、散、肺脈は浮、濇、短、脾脈は緩、大、敦、肝脈は弦、長、和、腎の脈は沈、濡、滑を五臓の平脈としている。

◆脈位について

病脈を診るためには、正しい脈位を知らなければならない。

正脈を診するときの正しい脈位については「難経」の五難、十五難に記載がある。五難では次の様に記している。「脈に軽重ありとは何の謂ぞや。然るなり。初めて脈を持する三菽の重さの如く皮毛と相得るものは肺の部なり。六菽の重さの如く、血脈と相得るものは心の部なり。九菽の重さの如く肌肉と相得るものは脾の部なり。十二菽の重さの如く筋と平らかなるものは腎の部なり。故に軽重となり。」と脈位を明らかにしている。

◆脈方について

検脈の方法は現在、脈状診と比較脈診が汎用されている。

一、脈状診

脈状診によって陰陽、表裏、寒暑、虚実、等のいわゆる八綱や病因、病証等を把握する事が可能となる。脈状診の原典は「脈経」の二十四脈である。脈状診は、手首の寸口（左右橈骨動脈拍動部）で脈を診る方法です。先ず、術者の中指は患者の莖状突起の内側拍動部にあて、次指は手関節横紋に沿っておき薬指は、肘関節に近い部にあて、拇指は「陽池」穴にあてます。三指のおく部位を寸口と言い、それぞれを「寸口、関上、尺中」と呼ぶ。

二、比較脈診

拍動部位を異にする脈を、相互に比較して臓腑、経絡の異常を診る方法です。比較脈診には、「素問」の三部九候診、「靈樞」の人迎脈口診、「難經」の六部定位脈診の三つの方法がある。現在、一般的には、六部定位脈診法が行われている。

◆六部定位脈診

この方法は元来、臓腑の異常を知るための診断法であったが、その後、経絡の変動も診察でき、病経、治療経の確証を得る有力な診断法となった。

脈診の部位は、脈状診の寸口の部位で左右の寸、関、尺の六部を比較し、その各部位を指の圧力の掛け方の違いにより浮、中、沈の三部位の脈状を診る

浮、中、沈

- イ、「浮」は寸口にあてた指頭が皮膚表面に最も近い拍動部位にあり、内腑や経絡の陽経の変動を診ることができる。
- ロ、「中」は浮脈においた指をやや沈めると、少し強い脈があらわれる。これは浮中沈の「中脈」の部位で「胃氣の脈」とも言われ、その人の生命力の盛衰をあらわしている。この中脈を更に沈めると、脈がやや弱くなり触れにくくなる。
- ハ、「沈」は中脈よりやや沈めて診る脈で、内臓や経絡の陰経の変動を診る。指頭の力が強すぎると脈の流れが変化し、正しい脈象を得ることが出来なくなる。

表 1 六部定位

左手		部位		右手	
浮 (腑)	沈 (臟)	身	口 区 分	沈 (臟)	浮 (腑)
小腸	心 (血脈)	上 焦	寸 口	肺 (皮毛)	大腸
胆	肝 (筋)	中 焦	關 上	脾 (肌肉)	胃
膀胱	腎 (骨)	下 焦	尺 中	心包 (血脈)	三焦

一分	六分	六分	七分
┌──────────┐		┌──────────┐	
└──────────┘		└──────────┘	
┌──────────────────────────┐			
└──────────────────────────┘			
二寸			

そして、本稿の最後に、本間祥白著の経絡治療講話から二十二脈の脈状譜図と祖脈の引用記載し六部定位と脈位の表を示します。

表2 脈位

(浮)	皮毛	肺
(中)	血脉	心
(沈)	肌肉	脾
	筋	肝
	骨	腎


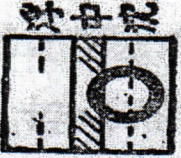

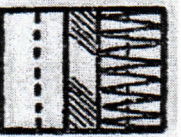

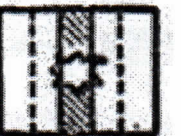
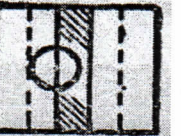

平成三十年十一月二十五日

齋藤 鳳観

脉状譜図

大きい線は堅い、細い線は軟かい、大丸は太く感じる、小丸は細く感じられる。

<p>洪<small>浮中沈</small></p>	<p>浮大にして力あり 表病、陽実証、高熱</p>	<p>沈<small>浮中沈</small></p>	<p>浮にして無く、沈にして強い 裏病、陰実証</p>
<p>芤<small>浮中沈</small></p>	<p>浮大にして中空 産後出血の如き脱血</p>	<p>牢<small>浮中沈</small></p>	<p>沈にして実大、長 陰により陽負け、命久しからず、身腫れ、息急</p>
<p>浮<small>浮中沈</small></p>	<p>浮にして無力 表病</p>	<p>弦<small>浮中沈</small></p>	<p>弦の如く張、沈実 肝膽実証の病 頭痛、心腹痛、疝</p>
<p>虚<small>浮中沈</small></p>	<p>浮大にして軟かく遅い 気血虚損、陰虚発熱</p>	<p>弱<small>浮中沈</small></p>	<p>沈細綿の如し 衰弱の極 一身痺れ痛む</p>
<p>乾<small>浮中沈</small></p>	<p>浮細綿の如し 貧血、陰虚、氣虚</p>	<p>伏<small>浮中沈</small></p>	<p>重く按じて、骨について指下に応ず 一時的の脈なり、実証の脈であるから後に実脈に復す</p>
<p>實<small>浮中沈</small></p>	<p>浮沈共に実大にして長 陽証とす、相火盛、陽毒</p>	<p>細<small>浮中沈</small></p>	<p>微より少しく大（浮沈の間に漸くあり） 寒、虚、元氣不足 精氣乏しく形骸せ足蹙れ</p>
<p>微<small>浮中沈</small></p>	<p>極細にして軟（極く見われ、重按して絶す） 精氣脱するの候、気血虚寒となる</p>	<p>澹<small>浮中沈</small></p>	<p>遅細短、時に一時洪る 血虚、瘀血、瘀血滞り</p>
<p>数<small>浮中沈</small></p>	<p>一息六至以上、熱を司る 力あれば実熱、浮数は表熱 力なくば虚熱、沈数は裏熱</p>	<p>遲<small>浮中沈</small></p>	<p>一息三至以下、寒を司る 力あれば冷痛、浮遅は表寒 力なくば虚寒、沈遅は裏寒</p>
<p>緊<small>浮中沈</small></p>	<p>往来力あり、少しく数不揃 体力盛にして熱ある時 身熱、腫物、癰疽</p>	<p>緩<small>浮中沈</small></p>	<p>浮大軟緩 胃の氣ある平脈</p>
<p>滑<small>浮中沈</small></p>	<p>滑かにして按じて躍る 元氣充ち、痰吐逆 滑数は痰火、内熱、胃熱</p>	<p>動<small>浮中沈</small></p>	<p>関のみでありて浮沈の間にあり、紅々として豆を転ばすがごとし 四肢引つり、疼痛、虚勞、榮衛虚し、崩漏、血痢</p>
<p>促<small>浮中沈</small></p>	<p>往来急数、時に一止 陽極、陽盛の病 熱病、陰亡びんとす</p>	<p>短<small>浮中沈</small></p>	<p>数に以て関のみであり、米粒のごとし 氣滞り、胃氣衰え、難治の脈、心腹痛、宿食</p>
<p>長<small>浮中沈</small></p>	<p>往来流利三關を出す 一身毒だ熱し起伏安からず 陽実証</p>	<p>結<small>浮中沈</small></p>	<p>往来緩、時に一止 陰実し、陽虚、積 氣血通ぜず、手足痛む</p>
<p>代<small>浮中沈</small></p>	<p>不揃いにして十動、二十動と定つて打切れる 元氣亡え、臟氣絶す</p>	<p>散<small>浮中沈</small></p>	<p>不揃い、花が散るかたち 氣血共に虚し、生命の根本がすでに離れかかるの脈</p>

名称	脈状	主病	脈状図
浮脈	軽く押しれば拍動が指に感じられ、重く押しれば感じ方が弱くなるが、空虚ではない	表証 虚証	
沈脈	軽く押ししても感じられず、重く押しれば得られる	裏証 (裏実 裏虚)	
遅脈	一呼吸に三拍以下、緩慢な脈	寒証 (実寒 虚寒)	
数脈	一呼吸に六拍以上、速い脈	熱証 (実熱 虚熱)	
滑脈	脈の流れが滑らかで、円滑に指に触れ、まるで盆に珠をころがしたような脈	痰飲、食滞 湿証	
澹脈	ざらざらとして渋滞しているような脈	瘀血、血虚	
虚脈	浮、中、沈でともに拍動が細かく、しかも消極的で力のない脈	虚証	
実脈	浮、中、沈があり、とても拍動が大きく、しかも積極的で力のある脈	実証	

脈診記録表

氏名 _____

年齢 _____ 才

男・女

職業 _____

主訴 _____

左手			部位			右手		
平	虚	実				実	虚	平
			浮	寸	浮			
			中		中			
			沈		沈			
			浮	関	浮			
			中		中			
			沈		沈			
			浮	尺	浮			
			中		中			
			沈		沈			

脈状

- ◆脈状診 七表………浮、芤、滑、実、弦、緊、洪
- 八裏………沈、微、瀦、緩、遲、伏、濡、弱
- 九道の脈…長、短、虚、促、結、大、牢、動、細

- ◆六部定位比較脈
- 肝虚証、脾虚証、肺虚証、腎虚証

◆ _____ 証

◆施術（取穴） _____